OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「韓朋賦」の性格をめぐって
Author(s)	西川, 幸宏
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2007, 41, p. 35-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10976
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「韓朋賦」の性格をめぐって

西川幸宏

敦煌文書中に「韓朋賦」と題される一篇がある。「韓朋賦」の写本は現在までに合計七巻が確認されており、「伯二六五三（甲巻）」、「斯二九二二（乙巻）」、「斯三二二七（丙巻）」、「伯三八七三（丁巻）」、「斯四九〇一（戊巻）」、「斯三九〇四（己巻）」、「斯一〇二九一（庚巻）」がそれである。[1] このうち甲巻には、「燕子賦」、「韓朋賦」、「救諸衆生苦難經」の三つの文書が併記されており、物語の冒頭と末尾に「韓朋賦」という題目が記されている。乙巻には、文字は不鮮明ではあるが巻尾に「韓朋賦」という記載を確認できる。また、丙巻は巻頭、丁巻は巻尾に「韓朋賦」の記載が見える。戊巻・己巻には、「韓朋賦」という記載は見えないが、他の写本との比較によって、これらも「韓朋賦」の物語を記したものであることがわかる。なお戊巻・己巻・庚巻は、元々は一つだった写本が三つに分かれたものであると考えられるため、[2] 結局「韓朋賦」の写本は全部で五種類あることになる。

これら五つの写本は、文字の異同が多少見られるものの、表現・内容はほぼ一致しており、同一の祖本に出るものと推測される。つまり、これら五つの「韓朋賦」は同一の物語であるのみならず、同一の祖本から発したテキストなのである。

以下に「韓朋賦」の物語の概要を記す。

昔韓朋という賢士がひとりで老母を養っていた。朋には仕官の志があったが、母をひとりにするのが気がかりだったので、妻（名は貞夫）を娶ることにした。その後朋は宋国に仕えたが、三年が過ぎても帰ってこない。そこで貞夫は夫へ手紙を送ることにした。手紙は朋のもとへ届いたが、彼はそれを御殿の前で落としてしまう。手紙を得た宋王がその文を気に入り、臣下たちに貞夫をさらって来れる者を募ると、梁伯が名のりを上げた。

梁伯は韓朋の家にやってくると貞夫をさらって行った。貞夫が宋国に到着すると、王はその美貌を見て喜び、彼女を皇后にしたが、韓朋に思いを寄せる貞夫は病床に臥せってしまった。貞夫が楽しまないので、王が臣下に良い案を募ると、梁伯が「若く美しい韓朋を奴隷の身におとしめれば、貞夫の気持ちも朋から離れるだろう」と進言した。王はその言を採用し、朋を奴隷の身におとしめて清陵台を築かせた。

その後、貞夫は清陵台を見に行くことを許され、馬飼いをしている韓朋に会った。彼女は「なぜ宋王に復讐しないのか」と問うたが、朋は「あなた（貞夫）の心はもう自分から離れているだろう」という歌を返しただけだった。貞夫はそれを聞くと血書をしたため、矢の先に結んで朋に向かって射た。朋はそれを読むと自ら命を絶った。

宋王が貞夫に乞われて韓朋の墓をつくると、貞夫は腐らせておいた着物を着て朋の墓穴へと身を投げた。侍従たちが助けようとしたが、着物が脆くなっていたので彼女の身体を捉えることができなかった。

宋王は墓を調べさせたが、貞夫の亡骸は見つからず、ただ青と白の石が一つずつ出てきた。王が二つの石を東と西に別々に埋めさせると、東から桂、西から梧桐の樹が生えてきて、二本の樹の枝や根は絡みあい、下に

は泉が湧き出した。王がその樹を伐らせると、樹から血が流れ、二枚の木片が鴛鴦となり飛び去って、跡には綺麗な羽根が一枚残った。王がその羽根で身体をぬぐってみると、艶やかに光り輝いた。頭のてっぺんだけ光沢がよくならないので、頭を磨いてみると、王の首は落ちてしまった。それから三年も経たぬうちに宋国は滅び、梁伯父子は辺境の地へ流罪となった。善を行えば福を授かり、悪を行えば災いを招くものなのである。

この韓朋と妻の悲劇の物語は、「韓朋賦」によってはじめて世に出たものではない。東晋の干宝『捜神記』に次のような話が収められている。

宋の大夫だった韓憑は王に妻を奪われ、城壁を築く人夫にされた。妻は夫に手紙を送ったが、憑はそれを御殿の前で落とし、手紙は王の手にわたってしまった。その手紙は隠語で書かれていたが、臣下の蘇賀が妻が夫に死の志を誓ったものだと解いた。間もなく憑は自殺し、妻は腐らせておいた着物を着て台から身を投げて死んだ。彼女の帯には韓憑と合葬して欲しいとの遺言があった。王が二人の亡骸を別々に埋めさせると、両方の塚から梓の樹が生え、枝や根は絡みあい、鴛鴦が飛んできて悲しげに鳴いた。宋の人はこの樹を「相思樹」と呼んだ。今、睢陽には韓憑城があり、二人のことを歌った歌が今もまだ伝わっている。

今日我々が用いる二十巻本『捜神記』は明代に編輯されたものであり、資料として必ずしも信頼に足るものではない。ただ、右の韓憑とその妻の物語は、唐・釈道世輯『法苑珠林』にも『捜神記』からの引用としてほぼ同文が見え[3]、しかもその末尾には「其歌謡至今存焉」ともいう。二十巻本『捜神記』は恐らく『法苑珠林』を襲ったの

である。

初唐に編纂された『法苑珠林』に、「二人のことを歌った歌が今もまだ伝わっている」とあり、また敦煌から「韓朋賦」が発見されたため、両者を結びつけ、「二人のことを歌った歌謡」がすなわち「韓朋賦」であると従来考えられてきたのである。なお、『法苑珠林』のいう「韓憑」と「韓朋賦」の「韓朋」とは、同音か、ないしは極めて近い発音だったのであろう。

本稿では、敦煌文書「韓朋賦」とはどのような性格をもった写本なのかという問題について、写本及び文体と押韻の面から検討する。

一、「韓朋賦」の写本

「韓朋賦」のそれぞれの写本を見てみると、抄写者は手本ないし原本のようなものを横に置き、それを書き写していると推測できる箇所がある。このことは、文字の脱落箇所から推定することができる。まず、甲巻の六行目末からの部分を見てみよう。（ここで引用する「韓朋賦」の本文は校訂後の文字のみを表記する）

書若有感、直到朋前。韓朋得書、解讀其言。

この部分に該当する戊巻の八行目からの箇所を記す。

書若有感、直到朋前。書若無感、零落草間。其書有感、直到朋前。韓朋得書、解讀其言。

二つの写本を比べてみると、甲巻では「書若無感、零落草間。其書有感、直到朋前」の部分が脱落していることがわかる。次に、己巻の二十二行目からの部分。

貞夫入宮、憔悴不樂、衣即綾羅、食即恣口。

先の例と同様に、甲巻の該当箇所（二十九行目から）を見てみると、

貞夫入宮、憔悴不樂、病臥不起。宋王曰、卿是庶人之妻、今為一國之母。有何不樂。衣即綾羅、食即恣口。

となっており、己巻には「病臥不起。宋王曰、卿是庶人之妻、今為一國之母。有何不樂」の部分が脱落していることがわかる。最後にもう一例、丁巻の三十三行目からの部分を挙げる。

使築清陵之臺訖、願暫往觀看。

ここも甲巻の該当箇所（三十五行目から）と比較してみよう。

使築清陵之臺。貞夫聞之、痛切肝腸。情中煩怨、無時不思。貞夫語宋王曰、既築清陵臺訖、乞願暫往觀看。

やはり、丁巻には「貞夫聞之、痛切肝腸。情中煩怨、無時不思。貞夫語宋王曰、既築清陵臺」の部分が脱落している。

以上の例から、脱落する直前の部分と、脱落箇所の最後の部分の文字が一致していることがわかるだろう。この

ような脱落の仕方は、手元に原本を置き、それを抄写した場合に起こったと考えるのが一番妥当であると思われる。例えば甲巻の六行目からの例なら、「書若有感、直到朋前。」の部分まで写し終えて、もう一度手本に目を戻した時に、脱落箇所末尾の「直到朋前」から続けて「韓朋得書…」以下を写してしまったわけである。このような誤写は、現代に生きる私たちにも理解できるものであろう。

二、「韓朋賦」の文体と押韻

さて、次に「韓朋賦」の文体を見てみよう。「韓朋賦」はその表題に見えるように、「賦」の一種と考えられる。この「賦」と呼ばれる文体について、『文心雕龍』詮賦篇は次のように述べる(4)。

> 詩に六義有り、其の二に賦と曰ふ。賦とは鋪なり、采を鋪き文を摛べ、物を體し志を寫すなり。（中略）詩の序は則ち義を同じくし、傳の說は則ち體を異にするも、其の歸塗を總ぶれば、實に相ひ枝幹たり。故に劉向は歌はずして頌すと云ひ、班固は古詩の流なりと稱す。（中略）然れば賦なる者は、命を詩人に受け、宇を楚辭に拓きしなり。是に於いて、荀況の禮・智、宋玉の風・釣、爰に名號を錫ひ、詩と境を畫す。

「賦」とはもともと『詩経』の「六義」の一つであり、作詩技術の一方法にあてた名称であって、「詩」と「賦」は同義に用いられていたが、後に「詩」から分かれて、別の文体と考えられるようになったという。

また、「宇を楚辭に拓く」というように、「賦」の文体としての起源は『楚辞』に求められる。清・姚鼐『古文辞類纂』の序目では、「辞賦は固より当に韻有るべし。然れども、古人も亦た無韻なる者有るは、義は諷を託すに在るを以て、

亦た之を賦と謂ふのみ」と述べており、いわゆる「辞賦」の一部のものは、『楚辞』以来、押韻することを必ずしも原則とはしなかったのである。では、「韓朋賦」はどうであろうか。

以下、論文中に引用する「韓朋賦」の本文は、甲巻を底本とし、他の写本によって校訂した。原字は（ ）、校訂字は〔 〕で表記する。「■」は原文磨滅字。傍点は韻字、換韻している場合は黒と白の傍点を交互に用いて示す。まず、「韓朋賦」の文体上の基調をあらわす部分を示しておこう。

宋王即遣人城東、（輕百丈之曠）〔拴百丈之壙〕、三公葬之〔禮也〕。貞夫乞往觀看、不（取久高）〔敢久停〕。宋王許之、令乘素車、前後（事）〔侍〕從、三千餘人、往到墓所。貞夫下車、遶墓三迴、嗥啼悲哭、聲入雲中、「〔臨壙〕喚君、君亦不聞」。迴頭辭百官、「天能報〔此〕恩。蓋聞、一馬不被二（安）〔鞍〕、一女不事二夫」。言語未（此）〔訖〕、遂即至室、苦酒侵衣、遂（睡）〔脆〕如葱、左攬右攬、隨手而無。百官忙怕、皆悉搥胸。即遣使者、〔走〕報宋王。

これは貞夫が韓朋の墓へと赴き夫の死を悼んだあと、自分の着物を苦酒（酢）に浸けて脆くしておき、朋の墓穴へと身を投げる場面である。この一節は散文のみで構成されており、押韻していない。

また、貞夫が韓朋の墓前で百官たちに述べたセリフ中に見える「一馬は二鞍を被らず、一女は二夫に事へず」という部分は成語であり、「韓朋賦」にはこういった成語的な表現が散見される。これらの部分はしばしば押韻するが、それは散文中に韻を踏んだ成語が引用されているためだと考えられよう。

一方、元来韻文であったと思われる箇所もある。

書曰、「浩浩白水、迴波（如）〔而〕流。皎皎明月、浮雲（■■）〔暎之〕。青青之水、（各憂其）〔冬夏有〕時。失時不種、（和）〔禾〕豆不（煎）〔滋〕。万物吐化、不（為）〔違〕天時。久不相見、心中在思。百年相守、竟（一好）〔好一〕時。君不憶親、老母心悲。妻獨單弱、夜常孤栖。常懷大憂、蓋聞、百鳥失伴、其声哀哀。日暮獨宿、夜長（栖栖）〔凄凄〕。太山初生、高下崔嵬。上有雙鳥、下有神龜。晝夜遊戲、恒則同歸。妾今何罪、獨無光（明）〔暉〕。海水蕩蕩、無風自波。成人者少、破人者多。南山有鳥、北山張羅。鳥自高飛、羅當奈何。君但平安、妾亦無（化）〔他〕」。

これは、貞夫が出遊したきり帰ってこない夫に送った手紙の部分である。ここは全体が概ね四字句で構成されており、手紙の冒頭二句を除いては、二句ごとに韻を踏む「4、4。」の定型を見出すことができる。つまり、「之、時、滋、時、思、時（上平七之）、悲（上平六脂）、栖（上平十二齊）、哀（上平十六咍）、凄（上平十二齊）、嵬（上平十五灰）、龜（上平六脂）、歸、暉（上平八微）」で押韻し、換韻して「波（下平八戈）、多、羅、何、他（下平七歌）」で韻を踏んでいると考えられるのである（『広韻』の韻目による）。

なお、底本にした甲巻の文字のままでは「■」「煎」「明」「化」が押韻しないが、「■」は丙巻・戊巻により「之」に、「煎」は乙巻・戊巻により「滋」に、「明」は丙巻・戊巻により「暉」に、「化」は丁巻により「他」に校訂することで韻字となる。

続けて他の部分の本文を見てみよう。

昔有賢（土）〔士〕、姓韓名朋。少小孤單、遭喪遂失〔其〕（又）〔父〕。獨養老母、謹身行孝。朋身為主意遠仕、憶母獨（注）〔住〕。〔故娶〕賢妻、成（功索）〔公素〕女。始年十七、名曰貞夫。已賢至聖、明顯絶華。（刑）〔形〕容窈窕、天下更無。雖是女人身、明解經書。凡所造作、皆（令）〔合〕天符。入門三日、意合同居。「共君作誓、各守其軀。君〔亦〕不須再（取）〔娶〕婦、如魚如水。妾亦不再〔改〕嫁、死事一夫」。

これは「韓朋賦」の冒頭部分である。ここでは、「父（上声九麌）、住（去声十遇）、女（上声八語）、夫、無（上平十虞）、書（上平九魚）、符（上平十虞）、居（上平九魚）、軀、夫（上平十虞）」が押韻していると考えられる。全体は大体四字句で構成されているが、必ずしも「4、4。」の定型が見られるわけではなく、二句ごとに押韻すると考えた場合、「朋」「孝」「華」「水」が韻を踏んでいない。

また、文末の四句「君亦不須再娶婦、如魚如水。妾亦不再改嫁、死事一夫。」に注目してほしい。ここは貞夫が韓朋に語りかけているセリフであり、「あなたはもう奥さんをもらわないでね、魚と水のように仲のいい夫婦でいましょう。わたしも他の人には嫁ぎません、一生あなただけにお仕えします」という意味になって、「7、4。6、4。」で対句を作っている。もし「韓朋賦」が韻文であるならば、対句のこの部分は必ず押韻するべき箇所であろう。この「如魚如水」の部分は、丙巻では「如水如魚」になっており、こうすれば「魚（上平九魚）」が韻字となる。しかし、甲巻・乙巻ではともに「如魚如水」になっていて押韻しない。これは、甲巻・乙巻を抄写した人が、「韓朋賦」を韻文だと意識して写していないことを示唆している。また、次の部分を見てみよう。

韓朋出遊、仕於宋國。期去三年、六秋不〔皈〕〔歸〕。朋母憶之、心〔中〕煩〔惚〕〔怨〕。其妻〔念之、内自發心。忽自執筆、遂字造書。其〔自〕〔文〕斑斑、文辭碎〔錦〕〔金〕、如珠如玉。「意欲〕寄書与人、恐人多言。意欲寄書与鳥、鳥恒高飛。意欲寄書与風、風在空虚。書〔君〕〔若〕有感、直到朋前。〔書若無感、零落草間」。其〔妻〕〔書〕有感、直到朋前。」韓朋得書、解讀其言。

ここでは、前半部分はほとんど押韻していないが、後半の「書若有感」から後の部分は、「前（下平一先）、間（上平二十八山）、前（下平一先）、言（上平二十二元）」で押韻していると考えられ、「4、4。」の定型も見られる。また、「意欲寄書与人、恐人多言。意欲寄書与鳥、鳥恒高飛。意欲寄書与風、風在空虚。」の部分は、「6、4。」の対句を繰り返す形になっており、「言」「飛」「虚」が押韻すべき箇所と推定されるが、このままでは押韻しているとは認定し難い。或いは「飛」と「虚」で押韻している可能性はあるが、それでも「言」が失韻であることは明らかであろう。なお、末句の「空虚」については、乙巻・丙巻・戊巻は「虚空」に作る。とすれば、第五句「風」と第六句「空」が押韻、第一句「人」と第二句「言」が押韻すると考えられ、第四句「高飛」を「飛高」に校訂して、第三句「鳥」と押韻させることもできるかもしれない。いずれにしても、甲巻の文字のままでは押韻せず、このテキストが元来韻文を基調としていたか否かは明らかではないのである。

このように、「韓朋賦」には、押韻しているように見える部分と明らかに韻を踏んでいない部分が混在しており、しかも韻文と推定できる部分は散文部分に比較して圧倒的に少ない。また、韻文と推定できる部分にも失韻が多く見られるなど、全体は散文としての色彩が極めて濃いものだと思われる。「韓朋賦」の中で、韻文で構成されてい

ると認定できるのは、先に挙げた貞夫の手紙の部分くらいなのである。

敦煌文書には、「韓朋賦」以外にも「賦」と題される作品があり、これらの中には物語性とフォークロア的な色彩を持った、例えば「燕子賦」のような作品もある。次にこの「燕子賦」の文体を見ることによって、「韓朋賦」の文体を考える手がかりにしたい。次の部分を見てみよう。(5)

A　仲春二月、雙燕翱翔、欲造宅舎、夫妻平章。東西歩度、南北占詳、但避将軍太歳、自然得福無殃。取高頭之悦、壘泥作窟、上攀樑棟、藉草為床。安不慮危、不巣於翠幕、卜勝而處、遂託弘梁。舗置纔了、暫往堤塘。

「燕子賦（甲）」の冒頭部分である。ここでは「翔、章、詳、殃、床、梁（下平十陽）、塘（下平十一唐）」で押韻していると考えられる。文体としては、四言句以外に六言句も見られるが、二句ごとに押韻するという定型がある程度確認できる。また、次の部分はどうだろう。

B　乃有黄雀、頭腦峻削、倚街傍巷、為強凌弱、睹燕不在、入来剿掠。見他宅舎鮮浄、便即兀自占着。婦兒男女、共為歓楽。自誇樓羅、「得伊造作、耕田人打兔、蹠履人喫臘、古語分明、果然不錯。硬努拳頭、偏脫胳膊、燕若入来、把棒撩脚。伊且單身獨手、嘆我阿莽薩斫。更被唇口嘯嘯、與你到頭尿却」。

これはAに続く箇所であるが、「雀、削、弱、掠、着（入声十八藥）、楽、作、臘、錯、膊（入声十九鐸）、脚、斫、却（入声十八藥）」で押韻していると考えられる。ここでも、必ずしも四言句ではないが、二句ごとに押韻するという定型がほぼ守られていることがわかる。

つまり、「燕子賦」では二句ごとに押韻するという定型がテキストのほぼ全体をとおして見られるのである。一方、「韓朋賦」にはこうした定型が見出し難いことは既述のとおりだが、このことは恐らく、敦煌文書に見られる「賦」という文体が、必ずしも一つの形式で律せられるものでないことを意味するだろう。

結語

今日残存する「韓朋賦」の写本は五種類ある。これらは別々の人によって抄写されたと推測されるにも関わらずほぼ同文で、各写本間に共通の祖本があったことは明らかである。しかも中には手本をもとに写したことにより生じたと思われる錯誤も何箇所か認められ、現存の「韓朋賦」が既存のテキストをもとに写されたことは恐らく疑いない。「韓朋賦」は耳から伝えられたテキストなのではなく、テキストからテキストへと伝えられたものなのである。

先行研究には、「韓朋賦」を「燕子賦」や「晏子賦」などの敦煌文書と共に分類し、「民間故事賦」などと呼んで、これらを「語りもの」の脚本であると主張するものがある。(6)

先に見たとおり、「韓朋賦」の文体は全体が韻文で書かれているわけではなく、対句などの押韻すべき所で韻を踏んでいない箇所が見えることからは、抄写した人にこれが韻文であるという認識がなかったことが窺える。また、「韓朋賦」は大部分が四言句から構成され（続いて六言句が多い）、「燕子賦（甲）」は四言句と六言句が多用される。両者はその点では似た文体をとるが、「燕子賦」は基本が韻文であるのに対し、「韓朋賦」は散文である。

最後に、「韓朋賦」「燕子賦」と共に「民間故事賦」に分類される「晏子賦」の文体を見ておこう。(7)

昔者齊晏子使於梁國為使、梁王問左右曰、「其人形容何似」。左右對曰、「使者晏子、極甚醜陋、面目青黑。且脣不覆齒、髮不覆耳、腰不附跨、面貌觀瞻、不成人也」。梁王見晏子、遂喚從小門而入。梁王問曰、「卿是何人、從吾狗門而入」。晏子對王曰、「王若至造人家之門、即從人門而入、君是狗家、即從狗門而入。有何恥乎」。

右の引用からわかるように、「晏子賦」は各句の文字数すら定まらない完全な散文体によって書かれている。こうして見ると、三者は共に「賦」と題されてはいても、「韓朋賦」は散文と韻文から構成され（ただし、これは変文のように韻文と散文が交互に繰り返される形とは異なり、特に韻文と散文の並び方に定型があるわけではない）、全体が韻文で構成された「燕子賦」や、散文のみによって構成された「晏子賦」とは文体を異にする。とすれば、この敦煌文書にいう「賦」が一体如何なる文体なのか、先述の『文心雕龍』などに見える伝統的な「賦」と同一のものなのか否かも含め、再度検討される必要があるように思われる。

先述のように、「韓朋賦」や「燕子賦」「晏子賦」は、「民間故事賦」として一括され、場合によっては「語りもの」の脚本のように扱われることがあるが、少なくとも文体を異にする以上、三者は同一の「語りもの」形式によって語られたのではなかったのだろう。

「韓朋賦」の文体の最大の特徴はその原型が想定しにくい点にある。「韓朋賦」の各写本間の異同は校訂可能な範囲であるから、恐らくは原型から大きく変化しているわけではあるまいが、だとすれば、その文体がなぜ「燕子賦」や「晏子賦」のそれとこれほどまでに異なるのか、更に検討する必要がある。

注

（1）本稿では、以下便宜上「韓朋賦」の七つの写本を甲、乙…庚巻とよぶことにする。

（2）本稿では、「韓朋賦」の原文を『敦煌宝蔵』（鷺江出版社、一九八九年）及び『法蔵敦煌西域文獻』（上海古籍出版社、二〇〇五年）の写真版によって確認した。庚巻については、参照した校訂本のうち、張錫厚『敦煌賦彙』（江蘇古籍出版社、一九九九年）のみがその存在を指摘しており、本稿ではその写真を見ることができなかった。『敦煌賦彙』によると、「僅存五残行」とあり、末尾の部分だけが残っているようである。また同書は、この写本を戊巻、己巻と同じ写本であると述べている。

（3）『法苑珠林』巻二十七、至誠篇第十九、感應縁

（4）『文心雕龍』巻二、詮賦第八

（5）以下「燕子賦」の本文は、項楚『敦煌変文選注（増訂本）』（中華書局、二〇〇六年）の校訂による。なお「燕子賦」には内容の異なる二種類のテキストがあり、『敦煌変文選注』は「燕子賦（甲）」と「燕子賦（乙）」に区別している。二つのテキストの文体を見てみると、「燕子賦（甲）」は主に六言句と四言句によって、「燕子賦（乙）」は全文通して五言句で構成されている。ここでは文体が「韓朋賦」と類似している「燕子賦（甲）」によって比較する。

（6）張鴻勛「敦煌講唱文學的體制及類型初探――兼談幾部文學史的有關提法」（『文學遺産』一九八二年、第二期）参照。

（7）以下「晏子賦」の本文は、項楚『敦煌変文選注』の校訂による。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

淺論《韓朋賦》的性格

西川幸宏

在敦煌文獻中存在著一篇題為《韓朋賦》的作品。現在已有五種《韓朋賦》的寫本得到了學術界的確認。從這些寫本的考察中，可以認為《韓朋賦》原本是存在一底本的，由這一底本衍生的複數的寫本進而流傳到敦煌並再一次為人抄寫。這就是流傳至今為我們所目睹的敦煌文獻。

在先行研究中，《韓朋賦》與《燕子賦》《晏子賦》同屬一類，被稱為"民間故事賦"。並有其為"說話"腳本之論。但是，如果將這三篇文章的體裁進行比較的話，就會發現雖然《韓朋賦》中存在著一部分韻文，其大部分還是以不押韻的散文形式書寫的。《燕子賦》全體是由韻文組成的，而《晏子賦》則是以散文形式存在的。基於這些事實，就會使人對《韓朋賦》《燕子賦》《晏子賦》為同一文體的這一結論產生疑問。敦煌文獻所提及的"賦"到底屬於一種怎樣的文體，它和《文心雕龍》中所敘述的傳統的"賦"又是否相同。鑒於以上的各種問題,我們還是有必要對敦煌文獻及《韓朋賦》進行再度檢討的。

キーワード：韓朋賦，燕子賦，晏子賦，敦煌文書，賦